

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494



第五福竜丸の大漁旗も展示して特別展「核兵器のない世界を」

平和の発信地 ピースおおさか

福田 幸治

昨年の九月十七日、大阪城公園の南側に開館した大阪国際平和センター(愛称「ピースおおさか」)は、戦争の悲惨さと平和の尊さを次の世代に伝え、世界平和に貢献する施設として、大阪府と大阪市で共同で設立された財団法人大阪国際平和センターにより建設・運営され、この七月末で約七万人の入館者がありました。

「ピースおおさか」の大きな特色は、日本の被害・加害の両面から展示していることです。このような展示は我が国では始めてとあって、大きな関心と反響を得ています。

- 1 施設の概要について
- (1) 展示室A (大阪空襲と人々の生活) 大阪では、先の戦争で五〇回を越える空襲により、約一万五千人の人々が亡くなりました。空襲により焼け野原となった大阪随一の繁華街・戎橋筋界隈を再現した模型や実物大の一トン爆弾の模型、当時の民家の模型などを展示しています。
- (2) 展示室B (一五年戦争) 錆びて銃身だけの三八式歩兵銃や鉄兜が入口におかれた展示室Bには、中国・朝鮮・東南アジアのコーナーを初め、太平洋での「玉砕」の島々、沖縄・広島・長崎、アウシュビッツなどにおける多くの資料を展示しています。
- (3) 展示室C (平和の希求) 地球と平和をテーマにした九面マルチビジョンやモニターテレビによるピースメッセージ、「運命の日」の時計などを展示しています。
- (4) 映像コーナー・図書室 映像コーナーには、九つの映像ブースが設置され、戦争や平和に関するビデオ約四〇〇本が視聴でき、さらにその奥には蔵書約

八千冊の大阪城天守閣を見渡せる図書室があります。

- (5) 講堂 一五〇名収容の講堂では、小・中学生をはじめとする団体や一般入館者を対象に一日一回、当財団が制作した16ミリ映画を上映しています。
- 2 企画事業について 上記の常設展示のほか、「ピースおおさか」では企画事業として、年間三回程度の特別展を実施しております。今年度の第一回は、「核兵器のない世界を」をテーマに、七月から八月にかけて第五福竜丸平和協会からお借りした資料などを展示しました。

第二回は十月から十一月にかけて「世界平和を脅かす中東問題」(仮題)、第三回は二月から三月にかけて「各地の空襲展」(仮題)を実施する予定です。

また、アジアから平和問題に造詣の深い研究者を招いてのシンポジウムや平和に関する講演会を開催するとともに大阪大空襲などの写真パネルや16ミリ映画フィルムの貸出も行っています。

このほか、平和研究所も併設しており、展示では表現しきれない平和の問題について研究を進めております。

このようななかで、「二年以降のこれからは「ピースおおさか」の評価につながると思います。

(財団法人大阪国際平和センター事業課)

ロシアから中学生も

八月二〇日、千葉県の日露協会が招待したウラジオストックの中学生十一名が展示館を見学。おりから夏の宿題の追込みでいっぱいの中学生・高校生と共に船を見つめました。「サンゴ礁のロシア語は？」と辞書を見ながらの通訳の説明に「核実験でこんな被害があったなんて」と驚きながら話し合っていました。

太平洋からネルソン・アンジーンさん来館

「：エレンの夫もこの春亡くなりました」ゆっくりとした足どりでたネルソンさんが、足を止め、厳しい表情でつぶやきました。展示館の中程、二度の甲狀腺手術を受けてのど元の手術跡が痛々しいエレン・ポアスさんの大きな写真を前にしてです。

八月十一日、原水爆禁止世界大会にマーシャルから参加したロン



太平洋の被ばく者の写真パネルを見つめるネルソン・アンジーンさん(8月11日)。

ゲラップの被ばく者ネルソン・アンジーンさん(64)が来館、昨年まで六年間マジュロに滞在していたカメラマンの島田興生さんが案内しました。「展示館は十年ぶりかな」というネルソンさんは、ピクのアロハシャツに緑の野球帽の軽装、世界大会で共に訴えたネバダ、カザフ、タヒチ等核実験の被害者との交流、一九七五年、フリー号に乗船しはじめて日本を訪れた時のことなどを熱く日本語で語りました。

一九八五年に移住した島民とともにいまはクエゼリン環礁のメジャット島に住み「まだしばらくはこの島で苦勞する」と、ときれとぎれに語られたロンゲラップの被ばく者の現状は、今なお厳しく、大國の核政策を衝くネルソンさんの口調には静かな怒りが滲んでいます。

夕刻、この四月開設されたマーシャル諸島共和国大使館のウィリアム・スウェイン一等書記官を招いて交流会がもたれました。

母親大会にも福竜丸 八月東京で開かれた日本母親大会の問題別分科会の一つに、江戸川・江東区のお母さんたちによって第五福竜丸の展示組写真が展示され反響をよびました。また、九月五日からの静岡県の青年団の研修会にも組写真が展示され、来年の三・一には福竜丸見学会も計画されました。組写真はこの夏、各地の原爆展に貸し出され、大阪の国際平和ミュージアム、高槻市の

公民館では長期間展示されました。観音崎で藤井節弥さんの追悼会 八月二日、横須賀市の観音崎で藤井節弥さんを追悼する「非核平和誓いのつどい」が開かれました。藤井さんは長崎の原爆に被爆、その後漁船員として太平洋のマグロ漁に従事していました。第五福竜丸被爆後も度重なる行われたアメリカの核実験で再度被ばく、久里浜の療養所に入院中の一九六〇年、二十七歳で入水自殺しまし



「船に会いに行ってください。大きな船体があることを語りかけてくるような気がすることでしょう」と結んでいます。 久保山忌句会

た。つどいは広島・長崎の火を永遠に灯す会等の主催で、「安らかにねむれわが友よ、波静かなれとこしえに」と刻まれた戦没船員の碑の前で開かれ、節弥さんの姉、山下清子さんも出席し思い出を語りました。

●副読本「展示館の中の船」 このほど小学校六年生用の副読本「展示館の中の船―第五福竜丸」が出版されました。著者は『死の海を行く』の長谷川潮さん。A5判24頁の小冊子ですが、「大きな建物いっぱい船」が遭遇し、見えてきたことを簡明にのべ、

本土復帰二十年の沖縄③

沖縄独立運動も明るみに

岩垂弘

本土復帰二十年を機に沖縄の一部の人々の間に盛んになった、自らの歴史と文化に対する再認識の動きは、これまで闇の中に埋もれていた「沖縄独立運動」をも光の中に引き出すことになった。

浦添市美術館主催で沖縄近現代史研究会会長の又吉盛清氏は、沖縄と台湾の関係を調べ始めてもう十八年になる。すでに『日本植民地下の台湾と沖縄』（沖縄あき書房）の著書もあり、沖縄と台湾の関係史研究では第一人者である。

その又吉氏が昨年十一月、台湾の基隆で貴重な資料を発見し、沖縄にもち帰った。それは、沖縄出身者が第二次大戦直後から、沖縄の日本復帰までの期間、基隆を舞台に沖縄の日本からの分離・独立を目指す運動をしていたことを裏付ける資料だった。文書類を中心に約千五百点にのぼるといふ。

友名嗣正（きゆな・つぐまさ）氏（一九一六〜八九年）である。同氏の経歴はまだよく分かっていないが、戦前に中国大陸に渡り、中国国民党幹部とも親交があったらしい。その国民党幹部とともに中国各地を転々とし、国民党の抗日運動にも加わっていたようだ。その喜友名氏が一九四八年、基隆で「台湾省琉球人民協会」「琉球革命同志会」を結成した。琉球とは、沖縄のかつての呼称である。人民協会には、当時の台湾在留の沖縄出身者約三百人が加盟し、うち約三十人が革命同志会に馳せ参じたようだ。

その一部の人々が喜友名氏の働き掛けで人民協会や革命同志会に加わったものとみられる。当時、沖縄は米軍の占領下であり、その帰属が世界的に注目されていたわけだが、人民協会と革命同志会が連名で五年に出した声明書では「琉球は日本に武力で侵略されたが、歴史の上からも、中華民国と琉球は一体である」として沖縄の日本復帰に反対、「中華民国帰属あるいは自由独立」を訴えている。各国に送った声明文も残っている。

見つかった資料の中には、「解放琉球 復興民族」の文字や、かつての琉球王国の王家である尚家の家紋の「巴紋」をあしらった協会旗もあった。また、その「巴紋」を真ん中に据えた国旗のデザインも見つかった。

喜友名氏らの運動は十数年続いたが、沖縄の日本復帰を前にして消滅する。人民協会に加盟していた沖縄出身者が次々と沖縄に引き揚げていったからだ。喜友名氏も復帰直前、那覇に引き揚げる。それにしても、興味深いのは、当時の中国・国民党が彼らの運動を支援していたことである。又吉

氏の調査によると、人民協会は事務所の運営費などの名目で台湾省政府から財政的援助を受けていたし、喜友名氏自身も台湾省政府から月給をもらっていた。

沖縄の人々による、日本からの独立を目指した運動はこれが初めてではない。これまでに沖縄で知られているものとしては、一九四七年に結成された「沖縄民主同盟」の一部指導者、五八年に結成された「琉球国民党」、七〇年に発足した「琉球独立党」によるものなどがある。が、喜友名氏らによるものは、台湾を拠点にした運動で、しかも台湾当局の後押しを受けていたという点で、これまでの独立運動とはやや性格を異にする。

いずれにしても、これらの沖縄独立運動は沖縄県民の同意をえることは出来なかった。県民の圧倒的多数が日本復帰を望んだからで、結局、それが実現した。と同時に、これらの運動も忘れ去られて行った。が、時を経てようやく発掘されることになった。「復帰二十年を機に、ウチナー（沖縄）の歴史を改めて見直すべきだ」（又吉氏）との意識が芽生えてきたからである。（ジャーナリスト）

もう一度考えてみたいこと三題②

「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ」を語ることの意味

小西 悟

去る五月十四、十五日、ジュネーブで「世界法廷プロジェクト国際セミナー」が開かれ日本被団協中央相談所理事長の肥田舜太郎氏と私の二人が被爆者代表として招か

れて参加した。会議の趣旨は「核兵器が国際法にてらして違法であり禁止されなければならない」とことを国際司法裁判所によって確認させる運動を起こそうというものである。

この運動のそもその発議者は、故ジョン・マクブライド氏の意志を受けて結成された国際反核法律家会議（IALANA）で、これにIPB、IPPNWが加わって、三者の共同主催でこの度のセミナーが開かれた。そのためあって会議では欧米の弁護士や法学者の発言が目立った。問題はそれらの発言の主旨である。

さすがにリチャード・フォーク氏（プリンストン大学教授）の基調報告は明快で迫力があつた。教授はアメリカの核政策をきびしく糾弾し、アメリカは圧倒的な核戦力をバックにして他国の主権を侵害している、核「不拡散」はその

意味でそれ自体が差別であり、これによって問題は解決しない、核兵器は廃絶以外にはない、と強調した。

ところが、討論に立った法律家たちの口からは「核兵器の使用と威嚇は違法とするにはできないが、保有まで違法とするには無理があるのではないか」という、私たちからすれば、いままさ、とあきれするような意見がたびたび述べられた。

私たちは、もちろんこれに對してただちに反論し、「核兵器はヒロシマ・ナガサキで使用されたことによつていまなお多くの人間を苦しめていることはもちろん、生産過程においても、実験によつても多くの被害者を生み出しているし、存在することによつて地球上のすべての人間を脅迫している。どの一つをとつても重大な犯罪である」と訴えた。

第二日目、私たち二人はそれぞれ三十分ずつ、「あの日」から今日にいたるまで人々を苦しめてつづけている原爆の恐ろしさ、その反人道・残虐の姿を体験と具体的な調査資料にもとづいて報告した。聴衆はこの一時間、身じろぎもせ

ず報告に耳を傾けていた。私は英語の報告文書を読みながら、いっせいにこちらに注がれている視線を感じていた。肥田先生の報告は、被爆米兵スミザーマン氏の治療など先生ご自身の臨床体験をまじえていっそう具体的で迫力があつた。

私たちの報告のあと、会議の空気が大きく変わり、「核兵器は保有もふくめて違法」が議長のもとめにとり入れられるにいたつた。そのかぎりでは私たちの報告が効果をあげたことはたしかであった。

IALANA日本支部の池田真規弁護士ら日本からの参加者は口々に「被爆者の報告の威力」を讃えてくれた。たしかにそうに違いなかった。しかし、そのことは裏をかえせば、被爆の実相、原爆のおそろしさ、その程度にしか知られていないことの証左にはかならない。そしてこのことは外国だけでなく、ある意味では国内についても言えるのではあるまいか。

「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ」は、その人類史的な意味とともに、もっともっと声高に語らねばならないだろう。（日本被団協国際委員長）



一九九二年五月、ジュネーブで開かれた「世界法廷プロジェクト国際セミナー」（左から二人目、筆者）